

想像力とアイロニー

高橋哲徳*

Imagination and Irony

Tetsunori TAKAHASHI*

Abstract

Since the formulation by S.T. Coleridge, it has generally been accepted that the harmonizing power of Imagination is superior to the combining power of Fancy, and that the origin of the harmony is considered to be in the mind of a poet. In American Renaissance, we can find this aesthetics of identity in the works of R.W. Emerson and N.Hawthorne, for example. E.A. Poe, on other hand, criticizes such a view of creation by regarding both Imagination and Fancy as the power of combination, and tries to shift the point of the analysis from the mystic creativity of the mind of a poet to the composition of language. His claim should be understood as, not a simple objection to romanticism, but the critique, the demystification of the romantic concept of the harmony and unity. In this essay we would like to define Poe's critique as 'irony', to use N. Frye's term, and make a close examination of the scope of it through a reading of his works, comparing with Emerson and Hawthorne.

Keywords : imagination, irony, American Renaissance

I

S・T・コールリッジは諸要素の単なる結合の能力としての「空想」(fancy)に「想像力」(imagination)を対置し、それによって詩人が「相反する性質を有するものや不調和な性質を有するもの」を調和させ、融合させることを創造の本質と規定した。このような調和と融合を強調するロマン主義的視角は、20世紀の芸術観にまで広く見出すことができるが、その最も重要な点は、諸要素の多様性よりも、それらの融合によって生み出される統一と均衡にある。すなわち、諸要素の物理的量ではなく、それらが質的に変容することによる同一性の確立こそが想像力の空想に対する優位の根拠となっている。この場合、統一や均衡は作品の形式的特性として考察し得るとしても、その起源は、「統一

の趣と精神」(a tone and spirit of unity)によって読者の共感を誘導する作者の「詩的天才」(the poetic genius)、すなわち主観性にあると想定されている。たとえば、コールリッジは、詩とは「詩的天才そのものから生ずる特性」であると規定し、「この詩的天才が詩人自身の精神にある心象や思想や情緒を捉え、これを修飾する」がゆえに、「詩とは何か」という問題は「詩人とは何か」という問題と重なると言っている。この視角において、同一性は想像力という主観の能動的な力によって確立されるとみなされている¹⁾。

一般にアメリカン・ルネサンスと呼ばれる19世紀アメリカのロマン主義も、多様性の中の統一を希求するこの同一性の美学を共有している。『自然論』²⁾の冒頭で、「宇宙に対して独自の関係を結び……伝来のではなく洞察の詩と哲学」を確立することによる(547)ヨーロッパの伝統からの断絶を説くR・W・エマソンも、こ

平成8年10月18日受理

* 総合教育センター・講師